

PhotoVoice 手法の有効性に関する評価¹

(1) フォトボイス手法を用いた取り組みの提案

フォトボイス (PhotoVoice) とは、写真を利用した参加型の問題提起手法である。アメリカで始められた。市民が写真を撮影し、それらを持ち寄って議論しながら写真を選び出し、そこに説明をつける。選ばれた写真を並べてストーリー仕立てにして提示することもある。問題発見の手法でありえると同時に、キャパシティ・ビルディングの手法でもありえる。

この手法を参考にして、放射能・放射線リスクの発見やその解決の糸口の解決に結びつける取り組み (ワークショップ) を提案・試行した。

すなわち、日ごろの生活の中で放射能や放射線の気になるポイントを皆で共有することによって、リスクコミュニケーションの課題の発見に結びつける。また、フォトボイス手法を用いて、放射能・放射線リスクで課題と考えられていることのマップを作ってみることにより、生活範囲内のリスク意識やコミュニケーション問題の課題の「見える化」を行う。

ワークショップの概要は以下の通り。

名 称：フォトボイス手法を用いたリスクコミュニケーション検証に関するワークショップ

日 時：2015年2月23日 10:00～14:30

場 所：柏市施設

運 営：木村・丸山・竹中 (パブリック・アウトリーチ)・植木 (段ボールコンポスト研究会)²

主 催：NPO 法人パブリック・アウトリーチ (国立保健医療科学院より受託事業)

参加者：5名

スケジュール³：

10:00 開始

10:00～10:30 本日の取り組みに関するオリエンテーション

10:30～11:00 写真発表

各自が撮ってきた写真について、柏市の地図上に提示しながら、各自が写真の説明をして、みんなで共有しましょう。

¹本資料の作成は特定非営利活動法人 パブリックアウトリーチによる。

² 柏市で参加者を募る段階から協力をお願いした。

³ 参加者への案内文より抜粋。なお、10:00～13:10 および 13:30～13:55 の振り返りがフォトボイス手法の試行であり、13:10～13:30 は当該研究における成果物の有効性に関する評価に相当する。また、13:30～13:55 の振り返りと 13:55～14:25 のインタビューは、ワークショップの評価に相当する。

11:00～12:00 グループワーク

写真を地図上に貼っていき、「自分たちが考える放射能・放射線に関するリスクマップ」を作成しましょう。

模造紙の上に写真を置いて、グルーピングしましょう。

リスクマップやグルーピングを見て、放射能や放射線のリスクに対する主要な疑問点を整理しましょう。疑問点に解決したい優先順位をつけましょう。

12:00～12:30 昼食

12:30～13:10 グループワーク

自分たちで整理した疑問点について、パンフレットを見ながら、答えを考えてみましょう。

13:10～13:30 インタビュー

「パンフレットについての感想や要望、改善点等について」

13:30～13:55 振り返り

アンケートに記入して、ワークショップ全体を振り返ってみて思うことを整理しましょう。

思ったことを各自で発表して、みんなで共有しましょう。

13:55～14:25 インタビュー

「ワークショップの感想や要望、改善点等について」

14:30 終了

参加者には、事前準備として、1週間程度で、自分の行動範囲の中で放射能や放射線が気になるポイント（気になる場所の写真や、気にしているもの、気をつけているものの写真など）について、写真を撮って、2月20日までに運営に提出することをお願いした。

参加者へのガイダンス資料は付録Aを参照のこと。

(2) ワークショップの試行状況

1) 自己紹介・オリエンテーション

自己紹介の後、木村氏から、資料の説明、ワークショップの趣旨説明、進行方法の説明がなされた。

2) 写真発表

事前準備

フォトボイス手法を用いたワークショップのために、参加者には事前に自分の行動範囲の中で放射能や放射線が気になるポイントについて、写真を撮影してもらった。その写真を基に、2つのサイズの写真を作成した。1つは写真の横に空欄を設けた大きいサイズ、もう1つは写真のみの小さいサイズである（図5）。

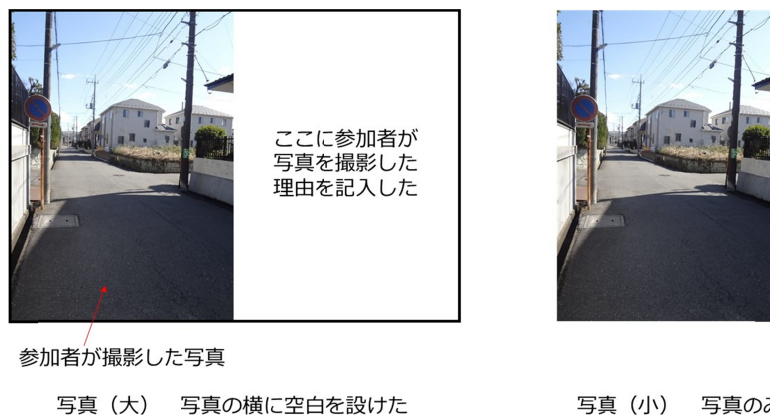


図5 フォトボイス手法を用いたワークショップで用いた写真

写真発表

参加者が、写真（大）の空欄になぜその写真を撮影したのかを記入し、地図上に並べながら発表した（図6）。



図6 写真発表の様子

主な意見を以下に整理する。なお、図7には写真（大）の空欄に書き込まれた説明内容を整理した。

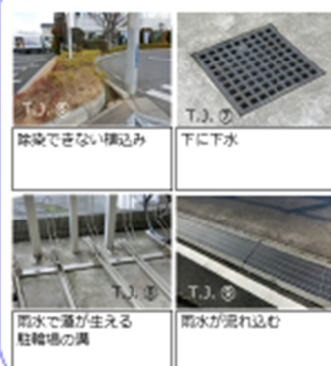
- （特定の場所と言うよりも一般的に）側溝や、水が流れる場所が気になる。
- （特定の場所と言うよりも一般的に）駐輪場の車輪を置く溝に水がたまっていて、藻

が生えているのが気になる。

- (特定の場所と言うよりも一般的に) 除染できない場所の雑草や植込みが気になる。
- 公園の状況が気になる。土の表層の入れ替えはしたようだが、木の根元や砂場はどうなのか。今後除染する予定がない公園もある。
- 雨水が流れる場所、たまる場所が気になる(水が上から落ちてくる場所、水たまり、低くて冠水しやすい土地、常に濡れている駐車場のターンテーブル、雨樋から地面に流れる水)
- 人が立ち入らない場所だが、「雨が降ると雨水がたまるようになっていきます」という看板が立っている場所がある。(浸水防止のために、その場所に水がたまるようになっていられるのかもしれない)
- 砂利や砂地が気になる(私有地だから手当てができない)
- 自宅の庭の砂利が気になる。防犯のために砂を敷いているのだが、そこで子供が遊ぶ。砂なので高圧洗浄もできない。
- 私有地が気になる。誰かが管理している場所はそれほど心配していないが、放置されている場所は気になる。
- 「震災直後、放射線量が マイクロシーベルト毎時を超えていた」という場所が気になる。
- 除染された場所は気にならなくなった。
- 低い土地を流れるドブ川は、あちこちから水が流れ込んで集まっていそうだ。
- 果樹園の果実の汚染が気になる。
- サイクリングロードは自然が豊かで心配だ。

写真の説明 (1/2)

一般的な気になるポイント



写真の説明 (2/2)



写真は撮らなかったが、地図を見て気づいた点

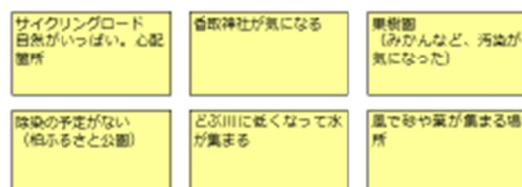


図7 写真を撮影した理由

3) グループワーク（リスクマップの作成、疑問点の整理）

リスクマップの作成

「2) 写真発表」で地図の上に並べた写真の配置を整理して、「自分たちが考える放射能・放射線に関するリスクマップ」を作成した（図8）。完成したリスクマップを図9に示す。



写真を撮影した場所を赤いシールでマークする

写真が重ならないように配置していく

写真を両面テープで貼り、赤いシールと結び

図8 リスクマップの作成



図9 自分たちが考える放射能・放射線に関するリスクマップ

放射線・放射能の気になるポイントの整理

参加者が、写真（小）を模造紙に置きながら、放射線・放射能の気になるポイントをグループ分けし、グループに名前をつけて囲い、気になるポイントの整理を行った（図10）（模造紙1）。

なお、グループワークで用いた模造紙は、付録Bを参照のこと。



写真を並べ、グループ化 グループに名前をつける グループを丸で囲み、見える化する
していく

図10 放射線・放射能の気になるポイントの整理

グループワークによって、整理されたグループを以下に示す。

- 公園：除染していない所、植込み
- 私有地：手がつけられない所、土と草
- 砂利（子供がいじる）
- 苔（子供がいじる）
- 側溝・下水溝
- 上から水がたれてくる所
- 雨水がたまる所、雨樋の下のコンクリート部分

マップやグルーピングを見て気づいたこと

「自分たちが考える放射能・放射線に関するリスクマップ」や、「放射線・放射能の気になるポイント」を見て気づいたことを、参加者が附箋に書き出し、1人ずつ読み上げながら模造紙に貼っていった（図11）（模造紙2）。



マップやグルーピングを
見る

気づいたことを付箋に書
き、1人ずつ読み上げ、貼る

図11 マップやグルーピングを見て気づいたこと

主な意見を以下に示す。

〔マップを見て気づいたこと〕

- 自宅の周りが多い。
- 子供が遊ぶ場所、関わる場所や、子供が興味を持つ場所が多い。
- 雨水がたまる場所が多い。
- 草や土など、自然が多い場所が心配。
- 除染が終わっているかどうか分からない。除染が終わっていても、きちんとできているかが心配。
- その場所がどういう場所なのか、細かい部分までは知らない場所が多い。
- 自分が行かない場所は気にしていなかった。
- 子供が行く場所（学校、公園など）は除染されているが、その道中は除染されていない。
- （自宅の周りに公園が多いので）放射能が多い場所があるということに改めて気づいた。

〔グルーピングを見て気づいたこと〕

- 自分で除染できない場所が多い。
- 人によって、気になる場所、基準が違う。
- 側溝・下水溝がたくさんある。
- 土に放射性物質が染みこんでも入れ替えることができるが、コンクリートはどうしようもない。
- みんな同じ年代の子供がいるということで、場所は違っても気になることの種類は同じ。
- 子供がいなければ心配な所は減る。

- 私有地、空き地などは今まで気にならなかった。身の回りにないので、視界（意識）に入っていなかった。

放射線・放射能のリスクに関する疑問の整理

これまでの話し合いを基に、放射線・放射能のリスクに関する疑問を附箋に書き出し、疑問をグルーピングし、代表疑問を作成した。その後、代表疑問に優先順位をつけた（図12）（模造紙3）。



マップや今までの模造紙を見ながら疑問を書き出す
 疑問をグルーピングし、代表疑問を作る
 代表疑問の優先順位を決める

図12 放射線・放射能のリスクに関する疑問の整理

代表疑問、および、それに属する疑問を以下に整理した。数字は優先順位である（同一率で2つある）。

現状

- 雨水のたまる所（側溝、下水溝）は、どの程度放射線量が高いのか？
- 枯れ草の放射線量はどうなっているのか？
- コンクリートに染み込んだ後の放射線量はどうなっているのか？
- 水道の水（学校、公園）は安全なのか？

除染後の安全

- 除染後の学校や公園は本当に安全か？
- 除染した後でも雨水が流れ込むような低い場所はどうするのか？

今後の対応をどうしていくのか？

- 除染していない所は今後どうなるのか？
- 私有地に関して何かできる方法はないか？

- 私有地他の除染はどうなっているのか？
- 今後、私有地の除染を行う予定はあるのか？

除染しなかった時の安全

- 除染を行わない私有地などは、何十年くらい経てば放射線がなくなるのか？

情報公開

- 最も気をつけるポイント・場所はどこか？
- 除染が終わっている場所を分かりやすく表示してもらえないか？

廃棄物

- 除染した後の土、木、草はどうするのか？
- 廃棄物がどんどん増えていくが、それをどうしていくのか？

(その他) 自宅周辺の除染方法、費用⁴

- 自宅周辺の除染方法は？ また、費用はどうなっているのか？

4) グループワーク (疑問の答えを見つける)

代表疑問に対し、「放射線便利帳」など⁵のパンフレットを各自が読み、答えを探した。その後、各自が答えだと思われる文章を附箋に書き、1人ずつ発表して、答えをまとめていった。解決したと思う疑問には青いシールを貼っていった。疑問が派生した場合は、運営スタッフが附箋に書き出した。(図13)(模造紙3)



パンフレットを読み、答



答えだと思われる文章を



答えをまとめ、納得でき

⁴ この質問については、グループワークの中で参加者間での意見交換がなされ、解決の糸口に至ったため、優先順位からは除いた。

⁵ その他に用いたパンフレットは、「子どもと未来のために ~放射線の基本と対策~ (柏市)」「調べてなっとくノート ホウシャ線ってなんだろう!? (環境省)」「中学生・高校生のための放射線副読本 (文部科学省)」

えを探す

書き出し、発表する

た疑問には青シールを貼る

図13 疑問の答えを見つける

以下に参加者が見つけた答えをまとめた。

現状【解決：自分で放射線量を測らなければいけないということが分かった】

- 「子どもと未来のために ～放射線の基本と対策～（以下、柏市パンフレット）」の14ページに、継続が大切である、測定器を貸し出している、との記述あり。
- 「柏市パンフレット」の8ページを読み、コンクリートに染み込んでいる放射性物質の量は少ないということが分かった。

除染後の安全【未解決：人によって考え方が違う。除染したといっても不安が残る】

- 「柏市パンフレット」の3ページに、市は0.23 $\mu\text{Sv/h}$ 以下を目標に除染を進めている、という記載がある。
 - 「柏市パンフレット」の13ページに、柏市に合った除染方法を考える必要がある、と書かれている。
- （新たな疑問）「柏市パンフレット」の18ページの記述を読んで、自宅の雨水枡がどうなっているかが気になった。
- （新たな疑問）除染をしたといっても、植込みなどまで除染しているかどうか、不安が残る。

私有地の今後の対応【未解決：方法は分かったけれども、実際はどうなのか分からない】

- 市の職員に依頼するなど、方法はあるようだ。
- 「柏市パンフレット」の20ページに、生活道路は除染についての記載があった。まだ除染は行われていないようなので、今後気をつけなければならないし、町会単位で動く必要があるだろう。

除染しなかった場合の安全【解決：半減期があり、自然になくなるには時間がかかること、安全ではないことが分かった】

- 「柏市パンフレット」の6ページ、27ページに放射性物質の物理学的半減期の記述あり。

情報公開【解決：公開していることが分かった】

- ・ 「柏市パンフレット」の 20 ページに、生活道路で線量が高い場所が載っていた。
- ・ 柏市のホームページに情報が載っているようだ。

廃棄物【未解決】

- ・ パンフレットに廃棄物の処分方法は書いてあったが、廃棄物がどんどん増えていくことについての疑問は解消しなかった。

(その他) 自宅周辺の除染方法、費用

- ・ 「柏市パンフレット」の 16 ページに、除染作業の流れが書かれている(自分でやる方法)。
- ・ 「柏市パンフレット」の 19 ページに、除染活動支援などの記載あり。

5) インタビュー (パンフレットについて)

「当該研究における成果物の有効性に関する評価(フォーカスグループインタビュー)」に該当参加者が放射線便利帳、柏市パンフレットの良かった点、悪かった点を付箋に書きだし、1 人ずつ発表した(模造紙 4)。「放射線便利帳」に関する内容については、成果物の有効性に関する評価を参照。)。

〔柏市のパンフレット〕

良かった点

- ・ 柏市に合った除染方法を知ることができた。
- ・ 柏市独自の考え・基準・対策が書かれていたのが良かった。具体的な問題が書いてあった。
- ・ 除染について詳しく載っていることが良かった。
- ・ 7~8 ページの図(一戸建ての周辺で放射性物質がたまりやすい場所)が分かりやすかった。

悪かった点

- ・ 7~8 ページの図のマンション版もあると良かった。
- ・ 解決できていない問題(例えば、除染の予定がない公園もある、など)があるはずなのに、それが記載されていないし、まるで除染をしているかのように書いてある。していないなら、していないと書いてほしい。除染しない理由も明らかにしてほしい。
- ・ このパンフレットはいいものだけれども、今まで手元に届かなかった。町会に入って

いないと、町会からの情報も来ない。

6) 振り返り（アンケート記入と発表）

「PhotoVoice 手法の有効性に関する評価」に該当

参加者が、本日のワークショップについてのアンケートに記入した。その後、1 人ずつ、ワークショップでの発見や気づきを発表した。なお、アンケートは付録 C に、内容は本節（3）に示す。

7) インタビュー（ワークショップについて）

「PhotoVoice 手法の有効性に関する評価」に該当

参加者が、記入したアンケートを基に、ワークショップの良かった点、悪かった点を付箋に書き出し、1 人ずつ発表した。悪かった点については、改善提案も伺った。なお、内容は本節（4）に示す。

（3）ワークショップの有効性に関する評価

6) 振り返りにおいてアンケートに記入、もしくは、発表したことを基に整理する。

ワークショップを通して、忘れかけていた放射線のリスクについて考えるきっかけになったとの意見が見られた。問題の再認識することによって不安になることはないかをたずねたところ、リスクがわかっていたほうが良いとの意見を得た。

また、人と共通の不安を持っていること（皆が子どもたちが行くところ、遊ぶところを心配していること）と、人によって相違点があること（人によって気になるポイントやものが異なること）に気づいたという意見が多く見られた。

さらに、話し合うことによって、不安なことが思ったよりも簡単に解決できることもあることを認識したとの意見も見られた。

フォトボイス手法の有効性としては、写真を撮るという行為自体によるリスクの再発見の効果、写真や地図、付箋を用いることによる視覚的に訴える効果を指摘している。

以上より、今回提案したフォトボイス手法を用いたワークショップは、放射能・放射線リスクの発見（再確認）に有効であること、視覚的な手法であることから情報共有（見える化）も容易であることがわかった。また、見える化が容易なことから、他の人との考え方の共通点や相違点を知ることができ、さらに、不安の軽減や解決への糸口にたどり着くことも、進め方によっては可能であることがわかった。

なお、ワークショップが楽しく進められたという意見も聞かれたことを補足しておく。

以下は、アンケートやグループワークで示された論点。

〔発見や気づき〕

- 最近少し忘れかけていた放射線について、考えるきっかけになった。
- 大変心配していた時期があったが、「もう大丈夫だろう」と判断した時から、考えることも情報を収集することも全くなくなっていった。問題が解決したわけではないので、これからも状況がどのように変化していくか見守りたいと思った。

解決していない問題とは何か？・・・柏市の基準は0.23 $\mu\text{Sv/h}$ だそうだが、植込みなどはまだその値になっていないと思う。自分が気にしなくなっただけで、問題はまだあるのだと思った。

今日のワークショップによって、問題を再認識したことになるが、それは良いことなのか？・・・良いことだと思う。知らないより、分かっていたほうが、精神衛生上良いと思う。

- 人による気になる場所が違う（多い）ことが分かった。
- 今まで気にしていなかった（以前は気にしたけど、忘れていた、または改善した）ことをよく考えるきっかけになった。人により気になる場所が違う（多い、少ない）ことが分かった。例えば、苔を気にしている人がいた。

いつ、人によって違うと気づいたか？・・・人によって写真の枚数が違う＝気になる場所の量が違う。自分は下水溝くらいしか気にならなかったが、他にもいろいろあるということが分かった。／写真を貼っていく作業のときに、さかんに「苔が、苔が」と言っているのを聞いて気づいた。

- 事故当初は講演会やセミナー、パソコンで自分で情報収集をし、自ら気をつけていたが、4年近く経ち、時間とともに意識が風化しているのを感じながら写真を撮った。撮った写真を子供たちと一緒に見て、その写真のどこが安全でないかを子供たちが認識していたことに驚いた（震災当時に子供たちにいろいろと言っていたことを、子供たちは覚えていた）。当時子供たちがどんな気持ちでいたのか心配になった。
- 放射能について、あまり深く考えていなかったが、子供の安全を改めて真剣に考えることができた。

〔印象に残ったこと〕

- みんな、子供が行く所、遊ぶ所を心配していることが分かった。
- 今まで友達とこういう話をしたことがなかった。皆も同じように気にしていることが分かって安心した。私が一番神経質であることも感じたが、友達も同じように感じていたのだと分かったのが印象的だった。
- 人によって気づくことが違うので、自分の行動範囲外のことも考えられて良かった。

- 不安なことも、話し合ってみることで簡単に解決方法が分かることがあった。個人により不安の度合いが違うことを再認識した。
- 写真、地図、付箋を使うことで、文字だけでなく視覚的に訴えるものが多く、混乱しなかった。興味深かった。

〔全体としての感想〕

- 改めて考え、考え直す機会が与えられたのが有効的だった。写真を撮り、地図上に貼ることで、問題や疑問点なども話しやすかった。
- 改めて、放射能について考えることが出来た。もっと多くの人に話を伝えたい。
- 他人と問題を共有したり、解決方法を探すのが楽しかった。
- ワークショップの流れ（手順）がちゃんとできているので、解決策を見つけやすかった。
- 初めての経験でドキドキしたが、勉強になった。ありがとうございました。
- 柏市がホットスポットだと情報を得て、たくさん講座を受けたが、不安はなくならなかった。放射線に関する安全かどうかの基準が明確でないため、不安はなくならないと思っていたが、この手法であれば、不安を軽減できると思った。

（４）ワークショップの進行に関する評価

6) 振り返りにおいてアンケートに記入、もしくは、発表したことを基に整理する。

参加者の選定について、同じ年代、同世代の子どもを持つ知り合いをグループとしたため、話しやすく、いろいろな意見が出たり、共通点が分かりやすかったという意見が多く見られた。一方、他の世代ともやってみたいとの意見もあった。

また、疑問点を整理しておいてから、改めて解答を探すというステップが、資料を見るにしても、調べやすく良いとの意見もあった。一方、今回のワークショップでは、解答を探す資料として、パンフレットのみを用意したので、そこに書いていないことについては知ることが出来ないとの指摘もあった。これについては、専門家を配置すること等で対応することが必要であると思われる。

付箋を用いて、意見を書き、見える化していくことも好評であった。

運営に関しては、総じて高い評価を得られた。参考までに、運営内部で準備した資料を付録Dに示す。

以下は、アンケートやグループワークで示された論点。

〔リスクマップ作成、疑問点の整理〕

良かった点

- 同じ年代で同じ子供を持つ 5 人でワークショップを行ったので共通点が分かり良かった。
- 同じ世代、同じ子を持つグループで行ったので、共通点がより分かった。
- 同じ地域だけれど、自宅周辺が全く重ならなかったので、行動範囲外のことも知れて良かった。
- 知っている者同士なので、いろいろ意見が出せた。
- 思いもよらなかった問題、疑問点が出てきた。
- 何人かいるといろいろな違う意見があって良かった。
- 忘れていた危険な場所も発見できた。
- 写真を使うことで、より具体的に各自の気になる場所を知ることができた。
- 目に見える形で、問題の場所やことが分かったので良かった。
- 柏全体のことを考えられた。
- 質問されることがちゃんと順番になっていて考えやすいし、答えやすかった。
- 何が不安なのか、何が問題なのか非常に明確になった。

悪かった点（ は改善提案）

- 違った年代の人と行えば、また違った視点で考えも出てきたのかもしれない。
いろいろな年代の人を呼ぶ（例えば、若い世代 3 人、お年寄り世代 3 人など）、
地域の元気なお年寄りの方に、子育て世代の不安を理解していただければ、地域全体で協力して活動できるかもしれない（お年寄りの方には、子供を持つ世代の気持ち
が理解しにくいかもしれないので）。
- みんなで話し合っているうちに、他人の意見に左右されることもあるのではないか。
- 地図の上に載らないものが話題になりにくかった。

〔パンフレットを用いた答え探し〕

良かった点

- 今からでも出来ることがあることが分かった。
- 4 年経った今だから、今後の対応として考えることができたと思う。
- 自分で解決できることも多いことに気づいた。
- 新しい問題点の発見もできた。
- 午前中の作業で問題がはっきり分かっていたので、調べやすかった。
- 今まで、疑問に思っても、答えを探すということをしなかったが、いくつかの答えが

見つかったので良かった。

- 問題点、疑問点について、解決策まで自分たちで主体的に考えられた。

悪かった点（ は改善提案）

- 事故当初にこういう機会や環境があれば良かったと思った。
- パンフレットに載っていないことは分からなかった。
 専門家を呼び、フォローしてもらおうという方法もある。
 事故当初は、「対策は今後検討します」という回答が多かった。今だからこそ、ちゃんと今後の対策を教えてほしい。

〔進め方について〕

- 口頭で話すよりも、付箋に書いて、貼っていくやり方がとても良かった。口頭だけだと途中で忘れてしまうことがある。
- タイムスケジュール通りに進むのは慌ただしかったけれど、順序良く進めていただいたので、とても良かった。
- 進め方はとても良かった。何を聞かれているかよく分かり、答えやすかった。
- 段取りよくスムーズに進めていただいて良かった。今、取り組んでいる1つ1つのことを自然に流れに乗せていただき、その中で、自分でも思わなかったことにたくさん気づくことができた。
- とても分かりやすく、またいろいろな問題を考えさせられた。

（6）まとめ

PhotoVoice 手法の有効性に関する評価では、フォトボイス手法を参考にして、放射能・放射線リスクの発見やその解決の糸口の解決に結びつける取り組み（ワークショップ）を提案・試行した。

具体的には、参加者にあらかじめ気になるポイントの写真を撮ってもらう。ワークショップ当日には、写真を地図上に配置したり、写真をグループ化したりすることによって、放射能や放射線のリスクに関する疑問を発見する。この疑問に対して、パンフレットを用いて、自ら答えを探す試みをする、というのがワークショップの概要である。

ワークショップを通して、忘れかけていた放射線のリスクについて考えるきっかけになったとの意見が見られた。また、人と共通の不安を持っていることと、人によって相違点があることに気づいたという意見が多く見られた。さらに、話し合うことによって、不安なことが思ったよりも簡単に解決できることもあることを認識したとの意見も見られた。

フォトボイス手法の有効性としては、写真を撮るという行為自体によるリスクの再発見の効果、写真や地図、付箋を用いることによる視覚的に訴える効果を指摘された。

試行したフォトボイス手法を用いたワークショップは、放射能・放射線リスクの発見（再確認）に有効であること、視覚的な手法であることから情報共有（見える化）も容易であることがわかった。また、見える化が容易なことから、他の人との考え方の共通点や相違点を知ることができ、さらに、不安の軽減や解決への糸口にたどり着くことも、進め方によっては可能であることがわかった。

したがって、福島における展開可能性としては、フォトボイス手法を用いることで、具体的な形でリスクを認識、共有し、その解決に向けて話し合う価値のある場面であり、かつ、共通の地理感覚とリスク感覚を持っている人たちの間で行われることが望ましい。

例えば、ある保育所において、職員複数名を参加者として、子どもたちの活動範囲におけるリスクの確認と、対応策の話し合いをするための材料を提供するという試みには応用価値があるだろうと思われる。この場合、共通の地理感覚（保育所周辺の散歩コースなどの範囲内）を持ち、共通のリスク感覚（子どもたちへの影響に対するリスク感覚）を持っている。また、抽象的な話よりも、具体的な対象について、どう対応するかを真剣に知ろうとする意識も強い。

全般として、フォトボイス手法は、視覚的に訴えることが可能であり、適切な見える化をすることによって、気づきを誘起できる手法であると言える。福島の放射能・放射線リスクに関するマネジメントやコミュニケーションの場面へも、幅広い応用が期待できると言えるだろう。

（５）福島における展開可能性について

以上の分析により、フォトボイス手法を用いることによって、写真を撮るという行為自体によるリスクの再発見の効果、写真や地図、付箋を用いることによる視覚的に訴える効果を指摘することができる。

今回のワークショップは、総じて参加者から高い評価を得ることができたが、その理由を挙げると、以下のようなになるだろう。

- 忘れかけていた放射線のリスクについて考えるきっかけになった、リスクの再認識ができたこと。リスクを認識することは、うやむやになっている状態よりも良い。
- 自分と人との共通点や相違点を知ることができること。
- 話し合うことで、不安なことが思ったよりも簡単に解決できることもあること。不安の軽減にも一定の効果がありそうなこと。

また、その環境要因を整理すると、以下ようになる。

- 柏市は、震災後に放射能・放射線リスクが大きな話題となったが、現時点でかなり放射線リスクが低くなっている。現在では、心配している住民があまり多くない。(少なくとも参加者はそうであった。)
- 参加者は、同世代の子育てをしている母親で、知り合い同士。子どもという共有のリスク感覚を持っている。また、住んでいる地域もそれほど遠くなく、お互いに住んでいる地域の地理に疎くない。

福島における展開可能性としては、フォトボイス手法を用いることで、具体的な形でリスクを認識、共有し、その解決に向けて話し合う価値のある場面であり、かつ、共通の地理感覚とリスク感覚を持っている人たちの間で行われることが望ましい。

例えば、ある保育所において、職員複数名を参加者として、子どもたちの活動範囲におけるリスクの確認と、対応策の話し合いをするための材料を提供するという試みには応用価値があるだろうと思われる。この場合、共通の地理感覚(保育所周辺の散歩コースなどの範囲内)を持ち、共通のリスク感覚(子どもたちへの影響に対するリスク感覚)を持っている。また、抽象的な話よりも、具体的な対象について、どう対応するかを真剣に知ろうとする意識も強い。

今回のワークショップでは、答え探しのステップでは「パンフレット」を用いて、自ら答えを探した。しかし、福島では、積極的に情報を提供できる専門家の協力が不可欠であろう。なぜなら、福島において、放射能・放射線リスクは「現在進行形」のものであり、答え探しに関しても、中途半端では許されないからである。参加者に対して、適切な支援をできる専門家が必要であろう。1節でも述べたが、放射線リスクに関するような、単純な科学技術だけでは解決しない問題を取り扱う場合には、専門家の分野も広く取っておく必要がある。リスクの波及範囲を整理して、それをカバーできるような人選が好ましい。また、地域の事情に通じている(ローカルナレッジの豊富な)専門家も用意する必要がある。

全般として、フォトボイス手法は、視覚的に訴えることが可能であり、適切な見える化をすることによって、気づきを誘起できる手法であると言える。福島の放射能・放射線リスクに関するマネジメントやコミュニケーションの場面へも、幅広い応用が期待できると言えるだろう。